開國起原

特
リ 伊5
2110
5

2110
5

宮城縣圖書

開國起原卷四

魯國使節船渡来上

米國使節の渡来より續ひく来る者を魯國より魯人を文化年間使節レサノフト長崎より来り清ふ所あれど其求る意せにして其書聘を作ることおきを論されしより今

米艦来航の事を聞き特に水戸提督フーチ
ヤチンに命じ再び國書を齎し来て要求を
る所あり又英佛西國よりも引續き軍艦使
節を派し和好通市を乞ふ外國人の毎に海
外に注視し毫も懈らず其の事機敏實に驚
くべし其の詳細概況を挙ぐ
嘉永六丑年七月防禦の為心得迄申ハ二
奉行ハ相模ハ和蘭別段風説書之内
一ロシヤ國海軍日本海へ被ハ用意方之其ハ
フレガツト軍艦之ハルラス永一艘タランス
一種

海舟書屋

ホルトレキツプ運送永一艘蒸氣永一艘にて「フ
イーセアドミラール官名フラーテン人名ノ指揮
に有之ハ右報意々アメリカ海軍ノ様子ヲ見
ハ心得ノ為に方之ハ

ヨロシヤ永百計方之英仏米伺ハ書付

大澤豊後守

一昨十九日中上置ハ去ル十八日渡来之ヨロ
シヤ永之英相紀ハ英軍永武艘蒸氣永壱艘運
送永壱艘合四艘ヨロシヤ國ヒートルフエ

ルク去子年十月出船仕長崎奉行ハヽ書簡態
ヽ持参いたしハ旨彼ヽ船主役ヽヽヽヽの中ゟ
ハよし致ル事一体ヲロシヤ國ヽ事ヽ文化度
江府参上ヽ事ヽ奉呈書且献上物等持度旨相願
ハ事江府参上ヽ勿論呈書献上物等も致ス及
ハ沙汰再渡致ス為諭書を以ヽ仰渡ハ筋
ヽ付此度渡来仕ハヽ不埒ヽ事ニハ度ハヽ間
書簡渡不申ヽ帰帆ヽ申渡ヽ為ヽ百計
ヽ筋ニハ度ハ此度渡来ヽ振子永教も多
く一ト通り申諭ハ為も中ヽ兼仕ハ為ヽ活為

海舟書屋

内帆申渡ハヽヽ直ニ浦賀表へ相廻り申ハ也
経汁ハハ為ヽヽヽヽ不穏成筋ニ付ヽ渡筋場合ニハ
度ハ為ヽ日猶接使ハ也ヽ右書簡渡通詞共ハ
和解申付ハ筋　日本大國ヽ官府ハ至極大切
ある事柄ニ拘ハハ事を以此度態ヽ渡来致ハ
旨右申上ハ事柄ハ反故を究為江戸表ニ為ヽ
者ハ度ヽ事為沙汰ハ国法も有ヽ
日本ハ蛮出ハ外国人を拒為長崎ニ蛮出ヽ申
筋ヽ事為ヲロシヤ官府ニ於為も其ハ法を守
り此度先長崎ヽ蛮出ヽ持越ハ書簡をヲロシ

ヤ國帝ニ対シ一等拵政官外國掛ニ事を支配い
ゐしゐがラーフチスセルローテ執筆仕ゐ旨
此書翰を以兼知相成ゐ以ゝ則外ニ猶一通ニ書
簡日本大國ニ出発中方宛ニ一封を以ニ
相渡し江戸表ゐ送之ニ相成ゐ様渡ス
右ハ和平の事ニ付度ゐ而通商ニ利益を
貪ゐ而已ニ渡ニハ無之日本國をおよびヨロ
シヤ國ニ携ゐ免至極肝要ニ事ニ付度ゐ旨仰
事を以書簡を以急速ニ出渡方ニゐ様渡し
度由ニ付右ハ之趣有計方ニ事個ゐ

海舟書屋

一此度持渡ゐ江府ゐ書簡を以ニ相渡度
由外ニ壹通を事ゐ腹心ニ者ゐ相渡ヲ旨中
間ゐ為ニ有之ゐ様仕ル様ゐ相成ゐ様ゐ
ゐ様を事ゐ以ニ出ニ相渡中度旨中間ゐ右書簡を
文化度ゐ論書相渡ゐ様ニ振合を以ゐ役所ゐ
呼出し紅毛ゐ取ニ出ゐ様ゐ席ゐ呼出し
ゐ様ニ仕ル

一右書簡ゐ為ニ相成ゐ様一先帰帆致し仰年仰
月仰日迄簡為渡ニ様方ニ作渡ニ致ル

一此度ハ右中立ゐ得共自然書簡為ニ渡ゐ様ニ

り欧上あ捧度旨申出ハ義を如何相心得ハ拙
て仕ル

一ヲロシヤ人ハ役所ハ呼出しハ義私宅服を変
し文化度ハ諭書申渡ハ義を長崎表用ハ拙て
相心得旨仰渡ハ者ハ此度も右を振合ニ相心
得ハ拙て仕ル

一ヲロシヤ人ハ役所ハ呼出しハ義を道筋茶ハ
役所ハも吏ニ同ス等て申付ル

一ヲロシヤ人ハ役所ハ呼出しハ義を文化度を
振合を以随後ニ者を四五人を限りハ拙て相

海舟書屋

心得ル

右ニ通来伺ハ以上

丑七月（嘉永六年）　大澤豊後守

東洋ハおろく魯西亜国を北海の司
ニ魯西亜国帝より命ゼラるアジユダント
ゲヲラール エンフイーセアドミラール
官名ポウテイアテイン人名此度長崎ハ来ル
極ニ九ニ通書面を以申上ハ

一右ヲ上ハアシユダントゲヲラール エンフイ

ーセアトミラール官名と者ヲ上ハ之日本大國
と官府ハ亦相大切なる事柄ゟ拘ハ事を以此
度態く長出ハ英ヲ上ハ夢ニハ愛ハ
一右ヲ上ハ事柄ゟ英ハ反対を相為江戸表ニ為
つ者ハ長崎と事務ハ清共清國法も有ゟ日本
ハ長出ハ外國人を於為長湾ニ先長出つヲ事
と事務ハニ付魯西亜官府ニおゐても其清法
を為り此度新ゟ先長湾ニ長出ヲハ相為長湾
ハ事務相ニも右筆ゟ場合ハ後分ハ為成ヲ魯
西亜國帝の好意空変を相成為変事ハニ事務

海舟書屋

ハ

一右アレエダントトゲテラールエンフイーセア
ドミラール官名事ハ此度長湾ハ事務相書簡
ハ属方仕ハ命を為居ハ此書簡を魯西亜國帝
の才一等移改官外國篇ゟ事支配ハ為しハが
ラーフ子スセル ローデ人名執筆仕ハ事ニハ変
ハ此書簡ニ為長湾ハ事務相兼和ニ相成つ
ヲハ則外ニ今一通ゟ書簡日本大國ゟハ老中
相宛ゟ一封ハ事務相直ニ長上江戸表ハハ
差之ニ相成ハ相仕度事務ハ

一此最初ヲ書簡ハ語友ヲ上ハ事務極ハ順心ヲ
ハ方ハ出シ不形今一通ヲ書簡何方ニヲ何時
見出ハヲ然ハ出ハ国ハ不度事類ハ

一右アジュダントゲネラールエンフィーセア
ドミラール官名後加ヲ中上ハハ魯西亞官有ニ
おろそ大切ニ考ハハ和平ヲ来ニハ産ハ殺
ヲ通商ヲ利益ヲ貪ハ而已ヲ要ニヲ安ヲ日本
国および魯西亞国ニ誓ふる玉粒所要ヲ事ニ
ハ産ハ

一日本語能心得居ハ中ハニ付此度ヲ魯西亞国

海舟書屋

語ヲ書簡ニ的蘭陀語等支那国語譯附属仕ハ
定ヲ右両国ヲ語ヲハ心得ヲ方ヲ要ヲ事
存ハ

一右アジュダントゲネラールエンフィーセア
ドミラール官名後出ハ要ニ付ヲヲ事柄ヲ延ク
ヲ相成ハ事不相叶要ニハ産ハ自何辛長崎ハ
事務極思ヲヲ以急速ニハ沙汰ヲ成不度将又
右アジュダントゲネラールエンフィーセア
ドラール官名司居ハ永ク何ヲも長崎港門便利
宜敷安心ヲ情不ニ碇入永繋仕ハ要ハ是国

右ハ度々願ハ

右ニ係ル恭敬ハ

暦数千八百五十三年第八月廿二日（嘉永六年七月十八日ニ當ル）　ポウテイアテイン印

右之通和解差上ハ以上

五七月

西吉兵衛

荒木慈八

橋村栄八郎

書面ハ今一通之書簡ハ度々変革文

書簡二通之内ニハ又ハ外ニ一通有之ハ未タ治定不致ハ

（下札）

海舟書屋

魯西亜全国一統の主魯西亜帝「ニコラース」第一世帝の名乃「レイクスカンセリイル」官名此書牘を　大日本国の執政小呈を日本国方今の形勢を熟察し両個の帝国相隣るの故を思ひ魯西亜帝方今一人の使臣を擇ひ帝の旨意を全く寄托し是を帝国日本に送るを使せ是を以て魯西亜帝の「アチュタント。ゼ子ラアル」官名兼魯西亜隊船の水師提督「ヨアンム。ポウチヤチン」人名を撰て此重任に膺らしむ

右使臣を送レる本旨ハ日本帝國方今の事況形勢を明白ニ申告し且日本國と其賢明の大君との時運に就て魯西亜帝深く憂慮する所の事を説明せし処尚又両帝國人民の利益を旨とし向後魯西亜國と日本との間拿隙怨讐を生ずさらし処両國の和睦安穏を固定するの策を献せしなんとする所ハ右の策に就て魯西亜帝の志願とする所ハ次の二件なり其一ハ両帝國の境界を定むるハあるも此件ハ両國ニ注ける洋中に記る所の諸事ニ就き後更ニ遅延せるとを得

海舟書屋

ず速を以て魯西亜帝の意方今必正ニ此切要の一事を始むへきの時形りと謂へり

然らも両國より會同して貴國曩北の極界ハ何きの島ニ限るといふ事を約定せんとと是れ當今の要務なるへし但し右境界を定むるハ又「カラフト」（印度ニ薩哈連）乃南陬ニ就ても言ふ所り夫魯西亜帝所領の地ハ其大ナ世界萬国ニ冠たれハ更ニ地を益し境を廣むるハ實ニ要須とせさる所なり然ともも魯西亜の臣民當然の利ハ帝ホ大きを思ハさるを得ず且両國和平の關係と両國

臣民の安穏を保固せんにハ両国の境界を確定
もるを良法となせとあり
其第二件ハ魯西亜帝誠心に預欲する所ふして
即日本国の内伺のもの滝ありとも貴国と約定し
て魯西亜臣民の注来を許し我国の産物をもて
貴国の有餘と交易せしめんことを請ふにあり
又我国の軍艦「カムサツカ」地名或ハ亜墨利加中魯
西亜領ふ注来する此達中日本の滝内ふ入りて
食料及び其他の須物を求むへきことなるを當
てハ是亦允准を渝へきことを預ふあり但し右の

海舟書屋

志預中大日本国の為に損失をる所あるをおき
ハ日本の政府必明察あるかるへし且魯西亜も
境を貴国ふ接をるの緣由あれは右第和平ふし
て且両国ふ利をるの議を容るへきことと他の諸
国よりも當然の程更ふ多うる色し
此諸件を申告せんが為ふ「アヂュタントッセヲラ
アル」官名兼水師提督「ホウチヤチン」人名ふ命して備
ふ其ことを貴国政府ふ詳明せしむ政府其言ふ所
を聞くハ我求る所ハ實ふ公明正直の来たるを
知意をるものとなるべん

水師提督「ホウチヤチン」人名ハ全權の重任に膺ゼて其候受せる規例に從ひ今次の大事を諸君子と會議し貴國政府の官員と親メ會合して諸事を約定せしむ

此度大日本帝府に使臣を奉そるのお旨ハ全く和親の意ふして第一方今の事情に鑑て我政廷の意を明白に申告し次に境界を確定そるおとの心要なる緣由を告白し更に両個大帝國の福安を保ち両國の民臣遵遇の際に能く互に永遠多益の基律を定めんと欲そるの為なり

海舟書屋

使臣「アヂユタント」。セヲラアル」官名兼水師提督「ホウチヤチン」人名此の如き切要の命を受けて貴國に到る者おもハ諸君定めて適當の禮儀を以て拓迎せらるへきおと予後おもを欽ふおとおし英明聰慧なる執政諸君我政府の意旨を細らに辨し我水師提督の申告を檢査して両國有益の事を催督をんこの為に心力を竭し給ハんおと是又欽仰を容もさる所あり

此書牘ハ帝の政府「サントペーテルヒユルク」魯西亞帝都ノ名に於く作る所あり時に千八百五十二

年即チ魯西亜全國一統の主魯西亜帝即位の二
十七年第八月二十三日即チ我嘉永五年壬子七月廿一日なり

レイクスカンセリイル官名ツセルロオテ親筆

俄羅斯書翰和解

大君皇帝首仁幸来俄羅斯統輿主宰之上宰相子
也利羅德。
大日本國貴御老中。

文

遞呈

海舟書屋

大君皇帝俄羅斯統輿之主宰遠視
貴國當日ノ物情ヲ日思ヒ両大國疆域相錯ハル之重事ヲ
遂起レ善意ヲ乃チ選ミ御前大臣俄羅斯水師將軍布
恬廷永平奉施シ全權。遣レ使ヲ前往セシム大
貴國ニ志之一者。乃チ詳細列ヲ當日一世之衆變
貴國之情形如何ヲ。為メニ以テ至レ露懐ヲ
貴國命運所レ感スル之心。是也。再者乃チ題ニ起両件事ヲ
以使ル下両國属人ヲ皆得セ両進ヲ其益ニ以断ニ決シテ両國来日
相磨シ相疑フ之處ヲ即以テ至ル乙干相和平安之誠實ニ也
甲
首件ノ事。

大皇帝所願行者乃今明邊界之地此事既知當日
物情及視圍注西國泉海有何無所籌之圖。便
不可再日久推延之是以
大皇帝以為緊要今即起事相會商議方定決
貴國居之海島。何當箕北方末尾之界矣本國
所屬之海島。亦何為南方末尾之界矣以外愿
兩相說明からふとの之南岸如何也
大皇帝既主俄羅斯。自古以來未有之國大廣如此。
自然無需要得何新地然而不堪失屬人之真
利因靈明思之明定兩國疆界者。乃為相和平

海舟書屋

安之本也。第二件事
大皇帝誠所願行者乃准本國屬人無碍来至
貴國海口相換貨物交易臨時本國兵船渡海
注かんさ忽か及北あめりか地者。有緊急事。
須到貴國海口以備所需亦無禁依其意之也
無疑。
貴國必明此愿者絶無犯
貴國真利也本國於
貴國以交界之故彼此相交自然之理義。有大
而越過他各遠國之理亦可明之矣。此皆該御

前大臣水師將軍布恬廷所奉命詳細傳明之
貴御老中遂越明可見本國意愿者絶無所不
肯核與正理矣。此事皆該將軍所欽奉全推尊
照細訓勅令會
貴國大憲相與議論而後尊照上命立定約會
章程矣總而言之遣使朝
大日本國
大主之定向者。一則乃開發本國意想天下當日物
情奈何二則乃詳明合疆界緊要之事三則乃
開啓兩國屬人互相有益有實之交。以致兩大

海舟書屋

國於至善至寧之地位也無疑將欽差有大重
事御前大臣水師將軍布恬廷。
貴國必待厚照禮秩與共高位矣亦無疑。
貴國
大主之智賢宰相諸老皆留心察本國所題之皆事。
及該欽差大臣所命謹列之解恬即行勉力妥
備互相省益事之始終矣
書在御都さんぺてりぶりけ八月二十三日
一千八百五十二年
大君皇帝俄羅斯統輿主宰即位以後二十七年

本文下書　國宰相公子也利羅德

大君皇帝首仁幸來俄羅斯國一統主宰の上宰相
命令子也利羅德書翰を以て
大日本國帝君中に宛如い
大君皇帝俄羅斯一統の主宰遠く
貴國當時の事情を考見て日に両大國境界の相雜い

印

海舟書屋

りに大事を思ひ仍て両國の好を相厚ひ兵を思
ひ立て帝都大臣俄羅斯水陸將軍布哈廷永平と卜
者を選ひ出し全權の事を取扱ハを使臣として
貴國に派遣しに相其為考て一大當時世界の色
く変化致しのと　貴國の事情形勢ハ如何で自
然に変を委細に中述　貴國の命運の感意を
る所以未如何成行に沙と無念とする故意をあ
き〻遠に也其二に其後の両條の事を中立両國
願ふの人民皆利益を進ミ両國世後幸福鞏心の変を
変去して相互に和睦平安に真實を両ろしめん

と約り第一條

大皇帝預ひ給ハ布ゝ国境界の地を分明に波
さんとゝ此度も既に當時て来情を知る者より
国境る裏海中乃地何れきの籌畫せさる布あらん
や依ゆゑ此後此領とゆゑ延引ちへきゝあゝ次右
故ゆ

大皇帝肝要の事と存奉今般此来を出立相共ゆ
會合評議して　貴国領の海島ハ何れきの北方拾
未の界と波し吾国領の海島を何れきの布を南方
拾未の界と波し共に かゝふこ島の南岸を何れき

海舟書屋

の領とゝ相渡ゝ上分明に反拾め給い
大皇帝ゆハ既ゆ俄羅斯の主とありて古来首
者の国土廣大如此ゝを自然と何れきの新地
を求むる者ハ各ゝ此た領分人民のよき便
利を反ゝハゆハ思ひを仍ゆ順細ゆ熟考波いゆ
両国の境界を反定ゝハ和睦永安の本と存い拾
才二條の事　大皇帝ゆ志愛ゆ預ひゝ者ハ布国て
人民　貴国の港に為り貨物を反換へ交易波い
を沛許波下且又隣国に布国兵新海を渡りかん
きつゝ兼北あめをゝの地に来ん者肝要乃事あ

ずく　黄國の港に渡り入用の品を求調ふ事あるべし是も其意に任せ其留おきハ銘ひ安く
取と存ず　黄國ハ此頃ハ別て親ひ篤を受して
黄國の利益を図ふ篤ニ安くハ思案ある
也く存ず其上本國ハ　黄國と隣境の事あれハ
相互に親交をるハ自然の理義にて其旨大なる
事國より他の遠國に交ハるとハ格別に相違る
へき譯なくハ思案ニ安ハ此事諸侯大臣
水戸將軍布怙廷なる者君命を受け委細に申陳
ふる而ハ

海舟書屋

諸侯中ニも寄ると此事ハ都考に下ハ國を預篤を以
理に符合せざる事なき所をハ考察に成下度く
と存ず此儀を皆右の將軍全權の命を謹奉して主
君ようの明戒和合に引合を　黄國の大臣と會
合して相共に評議して主命を見合を約束法度を
取極め度存ず大意を取撮ミ申ハ〳〵今般使義を
大日本國の大主に差上ハ誠意ハ其一ハ本國
より親交を相求めハ意味と世界當時の形勢事
情ハ何と云事を申立其二ハ両國境界を取定
ハ肝要に事を申立其三ハ両國領分の人民互

小利益あるの交りを相始め為大國を恐れ安全
の情を抱き松浦氏ハ能ひあく孫ハ且対馬
侯を大切ニ用向を百方ひい沸茶大臣水帥將
軍布告廷ハ　貴國ハ反叛叫嘩ニ応ぜハ為人
自分相応ニ礼儀と共ニ信と照合とハ含秘ハ不
ハも示敵ひ応ニと孫ハ　貴國大主君の賢明和
畧ハ孫ル親改応職方皆ハ心を留らもお國中置ハ
諸事ニ北欧先大臣ハ中井謹ニ陳述ニ及ハ書
翻譯文の版を案をられ昇速ニ反対ハ出精ニ撰
ハ日両國相互ニ利益あるく諸事始後ニ安全ニ

海舟書屋

成ハ松ハ不亟ニ不成ハ
右書翰を日都さんぺてりぶりげ1て相認八月
廿三日
一千八百五十二年大君皇帝俄羅斯統輿主宰即
位以後二十七年也

本文下書　國宰相公子也利羅德

印

大俄羅斯國御前大臣欽奉全權使東海水師將軍
布恬廷
為
照會事。謹傳本國首宰相公子也利羅德所書之
俄羅斯文。加阿蘭陀之語遞呈
大日本國
貴御老中以易通明本大臣遂照副本加唐語以
遞之自此國公子也利羅德之文
貴御老中必可見本大臣來此有大重事以內緊
急之良不明兩國疆界之事也此事也者必宜下
貴御老中會于本大臣兩相議論之。蓋

海舟書屋

貴國必不堪使本大臣一人去擅定兩國之疆界
矣。議論此大重事之人。遂時必宜遞摺至
貴御老中遂因以即得依議之勅宜居在
御老中所在之處江戶可辨十日以內之事長
崎必需數月之久矣是以懇乞
貴御老中無遲使本大臣帶緊要之人至江戶無
遲起事以論之注江戶如何本大臣遂遵照貴御
老中之意若海路走本大臣遂有船四艘若
貴御老中不依之本大臣遂候准走昇陸因尊聽
信為此照會順候近祉須至照會者

右照會ス

大日本國ノ御老中ニ

一千八百五十三年九月九日

癸丑年八月十九日

本文下書御前大臣布恬廷

印

大俄羅斯國ノ御前大臣ニテ全權ヲ欽奉シ

東海ニ使スル水師ノ將軍名者布恬廷ト云者又御掛合次第ナリ扨謹テ申述ルハ我本國首座ノ宰相ニテ國公ナル名ハ子也利羅德ト云者ノ書セシ俄羅斯文ニテ候夫ハ阿蘭陀語ノ書ヲ相添シハ七日本國ノ御老中方ハ御渡シ趣意ノ分明ナリ易カランガ為ナリ其上拙者右ノ副本之分ハ見合唐國語ノ書ヲ御渡シ申候カノ書體者晉レ共矢張國公ナル子也利羅德ノ文章ナリ是ヲ見賜ハヽ御老中方モ拙者是マテ相越セシハ重大ナルケ條ノ内ニテ危急發ニシテ實ニ両國邊

海舟書屋

疆ヲ明白ニ取紀候儀ナルハ御察シ有ベシ扨其
箇條ニテハ是非御老中方拙者ヒ御参會被下双
方ヨリ論判可被致ハヅノ義ナリ元来　御国ニ
テ拙者壱人罷出勝手ニ両国ノ疆ヲ取極候事
ハ屹度御不義知ト存候併此重大之事件ヲ論判
スル者ハ是非書面ヲ仕立　御老中方迫差出直
ニ御許容ノ勅書ヲ得テ　御老中方被成御座候
場所ヒ相詰ヘキ儀也其譯ハ江戸ニテ十日之内
ニ片附候程ノ事モ長崎ハ遠地ニテ必数月ノ久
モ懸ル故ニ候此次第ニ依リテ　御老中方ヒ深ク

海舟書屋

相頼フハ遅滞ナク御差圖被下拙者ニ用便之者
ヲ以連江戸表ヒ罷出遅々セス右一條ニ取掛リ
論判出来候様被成下候様扨其江戸ヒ参ルハ如
何スヘキ拙者　御老中方之御意ニ背カス若々
海路ヲ打越セトナラハ拙者船四艘ハ用意致候
若シ　御老中方前條御免ナクハ拙者陸路ノ通
行ヲ御免アレト相扣候品々御義引之處ヲ大切
ニ存ルニ付前許ノ通致御掛合候近況ノ御無事
ヲ奉賀候以上ノ次第ニテ御掛合ニ可及譯ニ候
右之段　大日本国之御老中方ヒ御掛合申候

一千八百五十三年九月九日即チ癸丑年八月十九日

本文下書　御前大臣布恬廷

大俄羅斯国御前大臣欽差全権使奉東海水師将軍布恬廷　為照会事。聴得本大臣得信貴国。有大不吉。即業已待理所。當待之期。不索貴国大憲回答

印

海舟書屋

本国所題之事。惟恭思　貴国大廣如此。雖有大不吉。公事不可辨止。宜遂加懇求隨起商議本国首宰相文所。通之事。一視該文。　貴御老中可見本国大皇帝所頒者。乃決定両大国之邊界。今因曠野間浸置居處漸所至于相近之是也。因此邊界未定之故。今即有只忽ところふ海島可疑之事矣。　貴国以北千島はあいの倭奴所。住之。忽ところふ在其内。早時属本国下。本国打獵打奥之人。久所處之地也。是故本大臣以為緊要。合　貴御老中詳細商議。忽ところふ海島。理當属　貴国乎。属本国乎此事已定而後

合邊界之事。當面會合　貴御老中亦可定矣。至于
本國首宰相所題之からふと海島。其所住之土蕃。
新近甘心安庇木国。　大君遂已命據守之然而既
貴国之人数年渡海。至該島南岸之あにわ港口以
打魚為業。而居住蓋房。以為素矣。今即宜合　貴御
老中定決。其人遂理当何如耶。若留住該港口本國
官遂照例必保庇之再一視本國首宰相所逓之文。
可見本国大皇帝所願者。乃交貴国通商之事也。蓋
無疑之。　貴国自業已料定。不可再禁止外国船入
共海口。以備各項所需之物矣。若一至于船来之

又常又多。貴国遂可至于不得照舊規拉出船所
需之物而不受船之貨矣。有何故耶。一則知理之人。
不可受人之助而使人自喫亏矣。儻若　貴国准国人。
預備外船所需之各物傳逓外人而聽其使受人之
金各項貨物。便准通商換貨物者亦如此。不可為難。
亦不可喂害也。　貴国素辞外国之貿易。喂国人之
用可盡出至無所存矣是真未之有也。　貴国所理
通商之事。不得為人之害矣。且常辞外人之交者。豈
非為難不如准通商之事乎。至于本国兵商船渡海
自西境　前往かんちやとかありりか今即亦か

海舟書屋

ろかふと等東部落比他各国以為緊要順到　貴国
海口矣因此上所列之故本国所為緊要者乃使貴
国寛心約定至少両海口以本国兵商船可到隨備
所需換貨也所願者即南方定一口近江戸以妥備
隨時通　貴国之大憲蓋長崎因遠之故所以不便
矣北方亦定一口在亦了嶋所以近本国部落矣隨
即亦可定該事之各段開款之各章程棄絶傷心約
束弾壓等各弊之規所不足以先裁度之事也本大
臣隨盼望　貴御老中心款待本大臣所通之事回
答等合本大臣全権使之銜位矣為此照會順候升

海舟書屋

祉須至照會者

右　照會

大日本國御老中　本文下書　布恬廷

一千八百五十三年十一月十八日
癸丑年十月十八日

朱印

大俄羅斯國の帝若大臣欽差全権使奉東海水師

將軍布告延ゝ照会せんと欲する事也然るに
大臣今夷國の伝を伝へ國に大不吉の出来あ
らるゝよゝ恐れ入れ上々只通理に於て必ら
待会を度紀極の期限を待て更に夷國変役の出
方こゝより和國をみ清ふ而の条々の田舎あらん
事を案むまゝき事あるへきハ心配あり去あら
ら恭しく思ハに夷國の大度かくの如くあれもた
とひ大不吉の出事ありとも大切の事を考あき
く糸せさる事あるを如て後と思へるに是く
頼をとむるハ隨記和國首宰相れ文書中に伝へ

海舟書屋

彼を所の事を出評議あらん事を懇切に清求め
ゝあり一に八此文書を一見あらんに八夷出発
中に和國大皇帝の頼をむ而も両國を疆の界
限を極に定定せんと欲する吉も知らせうる
くゝ其界限を定定せんと欲する此而を現に疆渡
ある荒野中にいつとかく家居を補理ひく遊
こに夷國の意界相迫つける而に和國も及ふ所紀而
こゝにいそもく此界限のいまゝ定らさる故に
是為今夷とろふ海洋の如き不審をへき事も
記もり 生國の如方かる千洋ハあいの侵奴あい

のハ倭夷人の自称又倭奴ハ波者とも誤りて倭夷人の本と思へるまやあいの倭奴とも皆倭夷人をさしていへるなるへしの住居もとる不まして家とろふ物も即ち門まあり世俗を最初より朝鮮国傾多ミ屠しが国の歌を猟し魚を取る者を此年来住居をる地あり此故まが大臣ハ是を大切の事と存ひ沈を貴ハ危中方こも又世家とろふの海島ハ道理まを貴ハ夷国まを屠を亀紀や又を朝国まを屠を亀紀やのまを細まを詳細まを評議かしたき事こハ此一事の治定せん後まをりてをを其時まを遼疆の界限をを別せん事をも貴ハ危中まも是を定

海舟書屋

むへし又朝国の首宰相の書あるハを不のから ふと海島の事こをりをを其島まを住をる不の土地 蕃とも彩迫より世心して朝国の下に安んし庇 ハれいり大君より遂まを已まを余ありて其地を拾 守せしを給へり夫より後 貴国の人民数年来 海を渡のそく此島の南岸あるあにわ浦口まをり く魚を取を以て生業とおしを地まを居住し房室 を営造して元来よりの事と思へり世事もまを 夫沖危中まを道理を以ておこれを論をんまを此島まを ゆる所の夷国人ことを如何拾まを変革せんとの

変動に及ひ度に至しこのあに湾口より出行せんとハ外国の貴人とも八例に随ひ我文弧の作に付けん来必定なり又一ハ外国首宰相の使へ渡せ所の文を一見せらるんハ外国大皇帝の親書む所北来ハ我国と交りを通商せんとの来なる旨をも知らせらるべく北来より後て ハいさゝか敵の心を抱せ多八重のうゝ次第国速やかつゝ料り定めらるて此返を外国永の海路より入る来を禁止しなり次其永を不用の物をもそれ〳〵を商ひるへき来ハひとしくハ外国の

海舟書屋

私共の入来る来ハ絶る来かく其数も又数多かる来あ〳〵ん時より来国相応を守りて相応より其不用の品くを無入るのこゝかして其永の貨物をハ称も有入さらんとする来も叶ひ弧き来ハ〳〵へき元其子細ハいうるとしいふ一ハ旧弊の如くあるハ為とひ筭数しをし弧貧窮ありともか時の間より相数より用ひをも重し一ハ各道理を知る人より後くハ他人の技術のこを受け他人をして授失あるしむる来をかすを重のうしもし来国よて国人より元評ありてハらかし元外国ハ永不

用のあれを始へ迄き外國の人こゝに始へ渡して
外國の人ゝを代あの金を更る事を許しまゝ
接くの貨あをも互に通商をる事を許し貨あを
以て貨あに交易をる事もまゝそのゝく許容あ
らん類と事六ゝしき事とも為せらきば又ゝ
ある患害なゝん事をも畏ゝ為ふまゝくやを
東き國まて外國の交易を許せらゝ意板ハを
國人の不用の品こもを遂ゝハをく外國のあに如
しをして殘りあきゝいたらん事を畏らゝゝや
云る事ある歟ゝとも為せらきばゝ始らハ生

海舟書屋

國に於て通商の事を理會せらきんに諸人の所
とある事あるまゝくゝ只あゝまゝに外國人の
交をのゝ辭をらゝゝを事も頗容易あゝすし
て通商を許容せらゝゝれ容易あるにハ及ばれ
又お國の軍艦商船海を渡りてお國の西方より
かんちやとかあめりかおの地方に航うんとを
るの時ハからふとお東方航路の地をを他の地
に比をを事ハを緊要の事にしてを國れ海口ハ航
を考せん事も甚便利あり茶体に教へ業さるゝ
きを細ゝれハ今お國の懇ををる而ゝ始事國

寛大の心を用ひらるゝ所なる海口二ヶ所を定めくに国の軍船商船を入津せしめ其船より不用の物をも借へ貨物を交易せしめらるゝ類の事ともあり殊に南方の地の江戸より近き所に一所の船を定めらるゝ物より餘程多く来る国の重宝より中通するよりも便宜あるべしとのよし長崎ハ江戸より遠き故より便利あるべし又和方北地忍そ海の間より一所の船を定めらるゝ国の船落より通ひ〳〵しめらるゝよし偽らん後ハ速より其事たるつきくそもの〳〵の関係又和親通商有様の

法則を定めらるへし〳〵將又北等の事たの上にも諸人の疑を偽り先〳〵へき筋を有りをて又威力を以て人を彈壓する類ハ強く其仕癖をもそへき約束等の事ハ茶時より論判するハハ及ハさる事なるへしさきハ大ハ其遠小企をする所々の事実ハ其中ふも大ハより偽へ中所を懇切より会釋ありハ回答よりくもの大ハの金権の使長ある官位相商ハ会釋ありの所ハ北等の事たの故より照會より及ひ次第に従ひ〳〵牛社の社をも察ひんかるべしより北照會より及

大日本國沖意中　　本文下書　布恬廷

一千八百五十三年　十一月　十八日
癸丑年十月十八日　初六日

大澤豊後ヨリ書狀義魯西亞國ヨリ私ヨリ差出ス
書翰和解西通共ニ成ル下一覽勿無仕ル要文
化度魯西亞ヨリ使義長崎表ヘ國王ヨリ書翰ヲ捧
シ来ル如ク之義ヲ諭シヲ上書翰ハ語有

海舟書屋

云ヲ退帰ニ付ル義ハ德川通信モ安ヲ國ヲ以
和好對ル　沖國法商法ヲ以要ヲ柄ニ力ヲ以
愛於極亞墨利加合衆國より持来ル書翰使長
ヲ認知ル除ル上ヲ領ニ余義譯ヲ以浦賀領ヲ
来ル語有ル義ニモ力ヲ以ル今般長崎表渡来
ヲ魯西亞永持渡ル書翰一体文化度ニ仰渡ヲ通
ル國法領ヲ以受ニ領相成来ル旨ニ付ル態ヲ余
義ヲ上ヲ筆ヲ力ヲ以ル時宜次第語有ル旨ニ
仰出ル以ヲ来ル渡ヲ以モ幸ニヲ扱モル以ル度ヲ
ニ亞墨利加合衆國書翰ヲ義モル國法領文ニ

旨を一意に論し方を定め金銭中之方を旨を以
相模に信板相成に致し方を以へを協和喜西
亜之義を文化啓厳重に御渡に吉原相守り
退帆仕今般速も長崎表に渡来仕候由に国法
色来しに板相関に致文化啓御渡に国法
之板一意を論しも江戸に更に相成に
相方より国法に破り成に筋合に相當未
く信義も落く相関へに板に致を等閑不相合
之義もつ方之様に等国へに対に致重厚
変動仕に板相関不て然も書翰に更に致も相

成に り、其次第に寄に反対もつ方之義を存
那に方に り異私持来に書翰を致文化啓御作
渡に通 清国法に致に強信反筋に致へた
金銭中之に板も相関に一意其後中論に
上時宜次第信反つ中に書翰更に致に速急速
に渡に も致及に致に早に退帆に致に
板つ相成丈厚く相論に板に御渡つ先来に
私に評議仕此後中上に以上

丑八月

大目付
小目付

海舟書屋

長崎奉行魯西亞水夫計方ニ付来伺ノ書
付一通ハ下ル被一覽勘案仕ル要
初ヶ條此度持来ル書簡ニ対シ評議仕ル上
ハ領事ニ会合ニ而ハ相関ハリ一意
清國法ニ領中論シハ上文反ハ方ニ付ニ且
文反方ニ対ハ今殺浦賀表書簡ハ文面相成ハ
譯ニハ相遠ハ無シ彼地ハ方ニ迫外國意
振ニハ振合ニ方ニ殊ニ同國ニ対ハ文化度松
前藩ニ長崎表ハ相已リハ松ハ論シニ上信牌

海舟書屋

ハ渡相成文基心反遠ニ領ハ方ニハ一且
信牌ハ渡相成長崎表ハ外國ハ意振
ニ清國法ニ限ニ何レニ存相寄成ハ
対敵先年ハ論書ハ渡相成ハ長ニ子復ニハ
反対方ニハ方ニ方ニ方ハ存ニ
二ヶ條目書簡ハ文反ニハ相成ハリハ振合
何渡度成ハ期月ニ対ハ先出ハ書簡ハ覽ハ不
ハ為ニハ方ハ元ラ定ハ不知ハ弱相成対
ニハ方ニハ此度ハ渡相成ハ方ハ法ハ期月ハ何出
ハリ此度ハ振松等為ハ論シ方ハ何れ此

方より和蘭甲必丹を以て沙汰して者を吉凶仰
達つ沙汰

三ヶ條目献上物之�書翰は更反相成ハ上を
献納物に限りは断りに為ハ筋にも相成る
歟ハ以へた向後は多数之弱と相成ハ
分て成丈相断り猶張る中之ハ上を事沙先領り
置ハ方にて分之沙

四ヶ條目長崎之儒文化度を江戸表より論
書は渡相成ハ事故元より禮服云用仕當然之
歟と事存ハ為此度を彼国より長紙ハ書翰更

海舟書屋

反ハ迄之歟にハへを長服等相改ハ筋を分之
為歟

末ヶ條道筋国の茶湯之者ハ歟ハ文化度
之振合にも相當之歟にて分之ハり書面之
領持談ハ書翰之歟ハ金歟中之にも相関ハ
り一意文化度を作渡ハ 清国法之類中論ハ
上更反て中右更反ハ上を彼方発ハ接拝者
之ハ朝目等張ハ同如ハり高長之ハ接拝寫之
相論し此方より甲必丹を以て沙汰して分之吉
中渡之且献納物等者之ハり成丈相断りハ

抵ニ致候而中之ハ上を其方限り先頭り至ハ
積相心得候段を別段相改ハニ不及ハ其
外ニ参を都而個ニ通相心得ニ中市ニ作渡ニ
沈ニ来候ハ私共評議仕ハ候書面ニ通ハ度ハ
候ニ此段中上ハ

八月

勝安房
大久保市郎左衛門
堀織部

丑八月四日伊豫ヨリ相渡

海舟書屋

三条殿
大目付ヘ
内目付
海防掛

芙

此度魯西亜より持来りハ書簡ニ参文化度彼
国使長永滞来ニ長中滞至ハ通ハ国法給而願
清反簡ニ付ハ将共応接中之ニ願申ニ付ニ
付而文ニ願給ニ中論ハ上書簡清反度候ニ中
ハ通長ハ合兼りハ書簡中何等ニ参相認者
ニ沈被見ニ付ハ可否を勿論模様ハ合ニ
長も無及沙汰簡ニ付ニ得を法而ハ可ハ、

此度柄山事多く打柄急く願及接拶頗能く其
方より申諭言を変を和蘭かひさんを以て及
通達ハ日出帆迄しハ振て申間ハ　清國法を
守り其地に渡来も渡しハ変に付百姓振跡器
吾を　清國威を不失振変亜方を云限を変を
乗常を接云用に効て彼ハ其外を変を時宜次
第を以て心得ハ事
但献上物指糸渡しハいて撥丈相断法の申
立ハ上を其方を限り先頃り亜て申事
右を通長崎表に相達ハ事

海舟書屋

八月三日

晴

魯西亜使長持渡ハ書簡法度ハ上首を変に付
一昨三日相達ハ書面を以和蘭かひさんを以
て及通達日出帆迄しハ振て申間と方を右に
効を彼国書簡をも不及接見出帆相促ハ姿
に相當事実不振ハ日帰帆を変ハ為志相尋帰
帆て渡飯にハいて遊ぶ和蘭かひさんを以て申
出吉申渡帰帆物渡又を江戸表より沙汰表

度高中間に〻滯永久渡海百姓向等不納合之
之振隨分心附書簡之義を支配向之者原漏不
之度然に振て之渡に事
但一昨三日相達に書面之内如何之心附に
義に未熟附相達に旨九振て之心得に事
右之通長崎奉行に相達に事

魯西亜永渡来之義百計方之義有
心附に義中上に書有

戸田伊豆守

海舟書屋

此度魯西亜永四艘長崎表に渡来仕候有之書
翰見出度高中三に付 右書翰之百に振に度
當に振に場之遠路に遠に相成浦賀表に て振
歟式額計等一渡来仕に付 最初に は国法中場
に上百計分相伺今般其品に考別度之に沃合
を以て御場所に上陸に 仰付 江戸表より渡
く出度老侯列を遂に方彼方之意味合も徴度
て御示に付 其段物条仕て中上百度方も別紙
に仕 度接之地に 在之に得共此度限り之百度
に西書翰之額を不相応に得共大意に為筋に

者ニ以上ニ別心ニ而ニ論ニ而滞留ニ而後
ニ事故將官共外四五人ニ上陸体裏ニ而被送ニ
被差遣ニ候列ニ遂ニ事故支障ニ係念ニ而
産ニ相別指ニ而被ニ相成ニ而ニ如何ニ而ニ
成ニ類同没石見ニ而ニ国話ニ越同人ニ中
被ニ仕御奉仕ニ中上ニ

一右ニ浦賀表被陸ニ土地ニ而ニ彼物不ニ而ニ
ニ得ニ度ニ而ニ被ニ間ニ合ニ中上外国
ニ而ニ被ニ出産ニ上想ニ右相
ニ而ニ被ニ相関ニ得ニ御国成相ニ中

海舟書屋

和ニ於ニ被ニ計心配ニ而ニ産ニ相ニ中ニ
新ニ飛ニ去ニ被ニ賜ニ中ニ魯西亜国ニ承ニ
中ニ仕ニ一国ニ右律ニ被ニ相成ニ長ニ
法国相互ニ交易仕ニ乃去ニ被ニ振等相響ニ
事故ニ傾向未定ニ外ニ清国ニ長ニ被
計度ニ中ニ事ニ新ニ既ニ アメリカ国ニ
書簡ニ捧ニ事ニ知ニ仕ニ清国ニ仕ニ故ニ右
等ニ被ニ計ニ速ニ アメリカニ相響ニ中ニ
達ニ清国ニ長ニ得ニ勤ニ仕ニ浦賀ニ意ニ
地ニ被ニ産ニ故ニ言ニ詰ニ不相交ニ後中論ニ

も亜そんの故海陸幕張有建書翰更有相海の変
此度若書そは有拔こ相撰いと重ねアメリカ
永滑来仕の義魯西亜そは有拔と相建仕いつ
右一来より爭端相発て中邦心を相合居い類
こなと猶更業術仕る変と深く心配仕いる右
等そ合得そは合石為亜い拔仕度事存い
一魯西亜国そ英ハ亜細亜測より歐羅巴測こ相
渉北亜米利加こも押及ひい清邦こも帝国そ変
こも方そ　皇国とも奥地夷ウルップを境と
仕数十年通信通商そ志願は居い変文化度レ

海舟書屋

サノツトは出作滑以来建造を出し石仕義を
業推仕い変フランス帝ボナハルテ以来国
用疲弊仕い故姑く他を顧んそ暇無そ却さい
況此度アメリカ測より書翰を捧い事ハ依機
會と存候こも　皇国は加警拔中上い秋は
為そ次第中上間心こも久意そは国地故存意
方そ使節を差出い況亜中上い次第存不中い
滑も若右拔そ多も度いりレサノツトい来
は怒をもつ中上い変只今と相成候こ厚意を
中出いつ裏銀変こ事存い事変は加警等中

上ハ訳合ニヨリテハ国地ニ接合不申ハヨリテハ
用ニモ相立兼ネ候ハ難ヲ申上呼唱ニテハ其
虚ニ乗シ掠奪ヲ仕様計ニモ成ル事ヨリ国内
ニハ油断相成兼ヲ申且アメリカ測ヲ太平海
ヲ隔魯西亜国ヲ地境相接候迚モ隣国ニヨリ右
ニ屈ハ受ニモ成ル訳ヲモ遠近ハ獨立ヲ
ハ国柄故早ヲ軍艦等ハ夜建大小国ヲ区別
ヲモ代国一同ヲハ夜扱ニ成ル訳ヲモ偏頗
ヲ論ニテ相成其上イキリス国ニヨリモ軍艦ヲ
催使ハ長ハ訳ニ相関係意趣計ハ訳ヲアメリ

海舟書屋

カ魯西亜二国ヲ挙動ニ付一隊ヲ軍艦ヲ
以テ浦賀表ハ罷越押ヨリ交易相願ヲ申訳ヲ察
拒ハ魯西亜アメリカ二国ヲ遠西洋人ヲ人物
姦猾ニヨリ反扱ヲ強慢仕此意接只今ヨリ容易
トハ不申諸国ハヲハ反扱振ハ国法相立居
不申其時ヲ変動ハ長ハ拒ニヨリ滅亡ヲ感ニ
屈ハ拒ニモテ相成訳ヲ是又深心痛仕ハ
但魯西亜ヲ火急ヲ多故無隙ヲ統場不見
立テ中ハ訳ヲ外国ニモハ長ハ幸ニヨリ服従
アメリカ再渡仕ハ事故久里浜ハ使ヲ容敵

早くより度々不虞ニ備ヘ相成ル様仕度ル
一昨年咬喝吧囉都督職ヲ業託新カピタン中上
ル筈も有之ル故若此度アメリカ永再度渡来
ヲ期月相延ル ユヘ支も ヲ若ハ尋ネ
筈も有ル度ヲ私共ハ心配仕ル此筈カピタ
ンヲ安條筈ヲ来月ニ迄一已ニ ヲ以居業咬
喝吧囉都督ヲ中ヲ昨年より ハ模様ヲ此度
只今ヲ相成ル事故如何ニ ヲ仕ル候今兼ネ
仕ル度是又一已ニ ヲ有計中ヲ為国都ヲ中ヲ
ル上ヲ筈ヲ事務ル上ヲ商賈永帰船ヲ後故十

海舟書屋

月末ニも ヲ相成当暮来春延ル迄ヲ ヲ
合ニヲ以届中ヲ為アメリカヲ板子深き海
意等ハ度ル ヲヲ使ヲ他国ヲ ヲ相用中ヲ為
ヲ ヲ察邪ヲ ヲ此ハ ヲ ヲ為三ル筈ヲ相貫ヲ
中氣配ニ ヲ案首尾能此筈ハ懇ニ相成ル様ヲ
重是 ヲ此上ル様ヲ只今ヲ相成ヲ中蘭人ハ
加ヘハ度ルヲ如何ニも案ニ ヲ支ル様若ハ察
ルヲヲ残ヲ為ヲ為ル故此筈ヲ見就ヲ筈故
悲序中上ル
右ヲハ尋外ヲ筈ニ相成ヲ入ル様ヲ海路ヲ

中上ハ如何ニ日夜安意仕兼意中熟止兼ハ故中
上ハアメリカ測ニ参先達而書簡和解ハ下ニ
付頻意ハ何届ニ成ヲ中上ハ変魯西亜国ニも
使長発上ハ次第倚動奔仕ハ変金ハ蛮情向ニ
ニハ而清猶立ニ偽ヲ奏怪ニ移陽ニヲ言ヲ巧
ニ以而ハ陰ニも其欲ヲ遂テ中ヲ二狼相挙其
宗ヲ欲ハん志意相違も亦ハ疑相引候社機會
ニ乗ハ西洋諸国も出張ニ仕式ハ而ヲ
皇国奉令ニ殿ハ意接遂日不足ヲ相成テ中今
殺魯西亜国ハ百殺ニハ見迫ハ大量ヲ要深ク

海舟書屋

感服仕ハ殺ヲ等国同一轍ニハ百殺ヲ亦ハ産
ハ而ヲ偏頗ニ論ハ事相乖テ中同相ニ百計
ハ不ハ押而不法ニ及事戦ヲ相成ヲ如何万一不
発ハ産ハとも天下ハ対ハ其辞省ハ社ヲ偏
頗ニ論ハ事端ヲ相国ハ而ヲ解嘲ニ辞亦ハ
産社上ハ時機ニハ曖昧ニハ墨容而所度ハ来ル者ハ不
拒若年限ヲ以其預意ヲ尽ハ而ヲ之ヲ速ヲ
永戦ニ操練ハ世話ハ産ハ而天下ヲ通商ニ利ヲ
等ハ為国后ヲ存ヲ出ハ戦ハ如ヲ所ヲハ
勘弁ハ産ハ方ヲ尽ハ事ハ社会ハ社会心配

熱中仕詰意も相達兼其上不文故召入ル認方
こも毎度城躑躅死ニ當ル況た如斯時長
心幸捨亜墨利加文者伴中上ル也海濱僻土ニ
小臣沸用ニを相立中ル度宜ル反捨幸賴ル以上

丑八月　　戸田伊豆ル

別紙浦賀表ニ滞在仕ル魯西亜船ル
一浦賀表ニ滞来も仕ル長ニ反抜振舞品ニ仕
尋仕度ル二付戸田伊豆ル嘉兵衛見迎ニ飯塚ニ
中上ル書面ニ被仕ル不一覽熟考仕ル要初間條

海舟書屋

魯西亜反抜ニ品ニ寄外國ニニ答合ニ相成と
の儀も乞ニ次第ニ而同國ニ依ニ既ニ文化年
慶安ニ伊勢も内ニ國柄今更好意を示し来
ル迚迚ニ將官其外上陸も仕伴更ニ格別ニ
仕反抜ニ為立ル而ニ
沸國法も相貫ニ不中　沸國威も相立ル筈國
ル為ル對ル仕ニ要亜屬變動仕ル松ニ而不ル
也同國書翰ニ旨意を相加不中ル儀ニ角
隣國ニ信義を表と いさし来仕ル依ニ
亜墨利加同様ニ為ニ仕ル書翰更反写

て彼は通信も亦て國柄て英亜墨利加同様
て取扱こ亦振亜は海法て通商貿易て相及
こ亦度を意振て際こ如り信義を以来りし者
と不禮を以法懇仕いとの度別は立て遂に半面
を却て清國威も相立不申萩麦混清て亦変
亜こ相雷り信を英國に亦示し亦振意こ相觸
き つ申也去右に扱振を張ち服容こ拘り不申
候真意を以て取扱方て以將を客館上陸等て
に扱亦て以ともめ何柏ふも其侯服に計方
もつ方て且奉り於て亜墨利加再游て長百計

海舟書屋

方こ答きに候申立に於て右を亜墨利加一國
て氣受等こ拘りに篇こ亦て走筆て長柄こ依
て亦意振て英等方て以て亦て弛に旨書
輪更百其外て候を此極て振合こ亦居亜に方
と事好に二ヶ條同魯西亜今殺游走て候張ち
信用強相成遂こ此極英夷を魯西亜亜墨利加
二國て擧動こ候て軍艦用意張し押ち預意相
遂度存意こもつ方之彼魯西亜に百殺等に加
らまり条りに、意接方六ヶ条只今り心
配仕に候且候て容館百走亜度との振右魯西

亜墨利加より徹底に頼て相撫の次第に至る
べし決て強ち疑念の三を抱きに百般方々に
而も不拘合て我も亦方々元来信義を以敬
きに以て応ぜざるに而は彼方を不安為撫の方法も
味方を姿に出て仮令亦亦重に不益に出て不
相撫候ば外国対諸蛮夷意を邪正に依
て夫々に意接方々に以て敵国 清国法其外度々
変しに譯に至て全く夷を所為柄に依り
に候英夷ハ勿論来舶を国に如何様方々に
辞稿に いるしに陸合安に出を仮令敬徹仕

海舟書屋

に移意を国に も質を信義を風に感化仕候に
を真に出味方中上に相撫に而も相撫に為書中
上に通商貿表異国百般を係ハ敬国是迄を通
交居に而に素に意接を場所に候を容能に
百設相成に拒仕度と を我を不相當を候に者
を至く品に寄上陸等仕に我も方を我を
御中に通に百般に意接に方法に三ヶ條月亜
墨利加再渡を翌月相延に工夫自然甲必丹に
に尋も方を に而を名て彼方ハ を次第に相
国に対た自然彼方を事情に捜索を渡に もて

相成ル二日数ヲハ不拘合ヲ偏ニも者ヲ召変
ル未条遅ヲ西洋諸蠻ヲ召藏来船仕
皇国奏命ニ成レハニ付時勢ヲ思召萬国擇む
所なく来ル小仕せ名年限を以其預意を度兎
され私戦を習練をうも天下と通商ヲ利を等
しく公用ヲ他ヒとの論さ以の外ヲ事なこて彼
方来翰中試ニ年限を以交易相預ムとの儀ハ
先般亜墨利加書翰和解ハ下ヲ良評議仕ヲ上
ル論も者ヲ倫安苟且ヲ時勢ニ入り易き為メ
奸黠ヲ蠻夷と雖も慫と雖ニ相関ハ拒年月を

期シ中之ハ依諾ニ者ヲ必定ヲ要眼着ヲ
安事を計ハ不ル孫ニ日一且交易ハ許容相成ム
ハ都ヲ如何拒ヲ辭意ヲ生も論計ル加彼ヲ測
中ニ論り佛国力智時ヲ間ニ疲弊及ひ仏等ヲ
枝物を以支ヲ出遊ヲ未ヲ仕ル孫ニ諸蠻入津
名年限中城郭同拒ヲ商船等反之始終萬邦の
汲人軍事等依后ハ事端日ヲ相起り果を神
武ヲ国忽ち佛狼ヲ掴家ヲ相成援来仏極ハ
彼古ハ地殼ハ思ハムとも迚も之直リ中ヲ変
ル書翰和解ハ成ハ下ハ長仆至ヲ見込ヲ論も

書面中上ハ同様ニ有之ニ付文体ニ相見
ヘ考要地ハ安任ニ成度ハ當職ニ之の右様ニ
存ニ付以来ニ而ハ表仕ハ
沖不安心ニ儀ニ存ハ一体ニハ廟算ハ治定
次第ニ為ニ諭方ニ有之義ニ存ハ依ニ
成ハ下ハ書面返上被仕評議仕候上以上

深谷遠江守
勝房太郎
大久保市郎左衛門
堀織部

九月

海舟書屋

一魯西亜使長来長崎表ニ謹而申上ハ則
長崎表ハ出江戸の方ニ此度不来ハ早
竟大日本国ニ沖法相守如此ニ而ハ
一魯西亜国帝使長ニ者ニ日本ニ対来柄ニ願
意ニ事及延引ハ為不相叶義ニ而ハ
一魯西亜国大切ニ事柄書記以ニ而ハ
フチスセルロ一テ人名相認ハ書簡江戸ニ方ニ
ハ対面相成ハ上ニ而ニ右ハ者ニ而事必決定
仕ハ譯ニ者ニ有之ニ究而ハ先ニ相記ハ振合ニ

相成ハ

日本國官府ニ而此一件ハ取扱ハ產ハニおゝてハ必定使節ニ者江戸表ニ罷出ハ多ハ関海ニ相成ハ事那ニ事柄ハ

速迅毎ニ互事ニ事を以魯西亞國官府ニ於て兼而罷出ハを長崎より江戸ニ方迅速

廿日以下ニ日数ニ而相整ヲ中類ニハ愛を以相考ハニ魯西亞國之切ニ事柄書記以而

しハ職相認置候ハ書簡相屆ハ未九四十二日許ニ門ニを右ハ言ヲ者ヲ右ハ言ヲ為ニ

海舟書屋

ハ評議も右四十二日ニ門二十一日許も

無り之為ハ成ヲ下事

ニ事ハ

一使節事を此度大切ニ事柄取扱ハ初ニ者

ニ此日限後迅ハ使節方ニ言ハ度ハ時を必

長崎ニ而事十分ニ居兼ハ事ハを決心ヲ仕事

ハハ

一阿蘭陀永便ニ而吾ニハ左ヲ者ニ事ニ

付使節中ニハを西海洋ニ方ニ魯西亞軍艦十

分罷出ハ多故是等ニ物ニを此永ニ内ニ而相

辨ずゆへ又使長之命を更に立るを外に仲
之ゆへ向ふ之唯直に日本国変之は輩之は後
合仕度ニは有ゆへ
一使長之者相考ゆへ日本国変之官府に於て殊
に肝要且大切之事柄取扱ゆ為直に内面會必
要なる事ハ書籍は地図是之上に而は兼知に而
相成其時に臨ゆて使長来江以先急き既に中
之ゆ時日之間に合は諸中上ゆ振て仕ゆ
暦数千八百五十三年変九月　魯西亜　十四日　和蘭　廿六日
嘉永六年八月廿四日

海舟書屋

長崎は事務より設為る設けられし場所なる不
便利にして適宜なるに依且総じて此事務
為事変置の遅滞を来す其所為を魯西亜
全権の任に適せざるを思ふ故に全権変に此
ゆき意接ハ政府の意にあらざるを為に事
務に告ぐ江戸よりの貴官来長を待て
我等の長崎を退帆をるを知らしむ
水帥提督止むを得ず長崎を退帆をること
を日本政府に予細に申告を為し続ハ事

失ハ魯西亞全權をして退帆をしめんと勉免
し所のものなる而已

千八百五十三年第十一月十日 即我十月廿二日

フレガット船パルラス船号

独改る官に捧けさる書翰の謄寫を貴官筒井
肥前守サマ川路左衛門尉サマ荒尾土佐守サマ
古賀謹一郎サマに送りて全權の迫時長崎に再
来航して會議を始むる以前魯西亞全權の向
題を熟慮せんが為にて

千八百五十三年第十一月十一日 即我十月廿三日

海舟書屋

フレガット船パルラス船号長崎港に於て

カピテインロイテナント官名ポスレート人名

日本を退帆する由故を長崎出港に迫て魯
西亞全權方今封書を差出のこと會議の為此地
に来る所の貴官筒井肥前守サマ川路
左衛門尉サマ荒尾土佐守サマ古賀謹一郎サマ
に送る又全權江戸に至らん為め再ひ日本に
来る時一旦長崎に入港せんことを此時にかな
て若長崎に来る貴官に會ふ事を得さし

て我問題の談話を受る事能ハさる時ハ速ヶ
江戸に帰る事〜

千八百五十三年第十一月十一日 即我十月廿三日

フレガット船パルラス号長崎港ヶ於て

全権の命を受く

カピテイン、ロイテナント官名ポスレイト人名

魯西亜使節より送出ス書翰

進達仕ル義中上ル書付

大澤豊後守

海舟書屋

水野筑後守

當港滞船ヶ魯西亜船四艘共此節出帆ニ仕候
中立ル二付未ハ通翰も無之間ヶ敷為相
尋ル義ハ老中方ヶ書翰壱封差出委細書中
ニ申上ル旨ニ付御答ヶ義も不申立候意旨
ル二付再ヶ差紀ル義速速渡来後三ヶ月ニ及
ハ通翰も無之ニ付而ハ當方ニ滞船ヶ無之故
出帆ハ延引日数を離れさる旨申立ル二付
猶存意相紀ル様ヶ御示諭不申立全く為ヶ
申立ル通浦賀表ヶ相出て申様子ヶ察ル義ヶ

右之業務は沙汰之儀も方今建白書之中流商
不入引留亟に付此上浦賀へ相廻りに付ては
不都合之事務に付猶又拙者共引留亟且筒井
肥前守外三人出張之旨に付其筋中達に付変役之出張に相成に付上
陸之儀に付変故此上商所に滞永逗留仕居中之
何之ても浦賀表に相廻に見込に付変
化有先格も有之且は内海沙汰之儀も追に当
私共限り心得を以地所取扱為養生運動上

海舟書屋

陸仕中に付ては取締向之義は先年之振合に
准し厳重申付に付右に付ては亟に書簡一
通差度に付何れに も進達致度旨に当再急度
出に当則其筋別封に仕差上申に付之此段申
上に以上

五十月

大澤豊後守
水野筑後守

長崎奉行より今般魯西亜船仕に付再渡
之儀合不相分に付に付彼地に出張之儀

く出張こ致ス儀ニも相成ル上来月ニも再
渡仕右ニ而ニ右様ニ立ル定ニ江戸表ニ相廻
ル為し候合ニ而留ル ヒも此度中之ル通隨意ニ
場所ニ上陸致ス右ハ而ニ滞永仕ル儀他ニ
ス如何ニ計ニ中ニ付ニ而ニ古来伺ル書面ニ成ル ハ
一覽熟考仕ル ニ別紙長崎ニ於ル中之ル通ル間ニ
肥前ニ初設ニ ハ迄輸ル渡し ニ付使節ニ示渡
ニ為ル致ス ル様中渡ル ニ先方終ニ此上永ニ
滞永致ル ハ病気ル ハ様ニ ハ ハ
為ニ ハ国法ニ様ニ合ニ ハ限上陸ニ致兼

海舟書屋

居候筋ニも文化度小比較仕ル様ニ致
迄使ル小屋等補理ル様中達ル ニ場所見
受度候中出し ニ上兎角江戸表ル ニ出ル ヒ中
を辞程ニ ハ為し支是隨意ニ中之等いたし
小身品ニ相論し ル ニ望ニ場不等中之ル様ニ
伺ル多渡ニ ニ聲論筋ニ而不少 ニ付度し不中若
文丈ニ ニ ヒ限り格別ニ好意を以ル取扱し
ル ニ彼是渡ル ニ望中之上ハ江戸表ル伺の上ル
らてハ然度届ル中論し ル限ニ次第相図ル
ニ去ル廿二日封書等ニ出ル通仕ル様

に奉行百姓皆帝國使臣に接待を禮に在を廟
堂を思右と々齟齬仕候を音疑念を生し直
に内訴も仕中上且再渡を長江戸表に滯留仕
中に渡を一意長崎に渡来仕其所に於て
老役と意對不渡に付又を中立に一條に付後
ものに言を言を若を不建江戸表に発向仕旨
に書面奉行に差出し退帆及に始末柄一と し
て隣義を重し忠告を以り最初を中立を受く相
及し實々風土を異候に感し病災等多く進退
窮迫に付し に押隠し事情不有相を相詳を

海舟書屋

扨し再渡を長崎に滯留に相待居中に
於て逆推仕江戸表に在長崎に於て
種に仕口亂十分に相見へに付退帆後看
病に役を長を に益を拙を者を
講共宅に角一旦に波地に在長を返輪も
長を に相撤只今に渡来仕に渡し相成
度き に付願き に成度く波地に長崎に上
に此度を願未残り を面調品に考を留ひ
さん等に外國を接拒も相尋再渡待受に
も更に渡来を長に到り役を より一旦帰廟

て後相国に上陸府て仕合に下知相成に付き
先方如何体不偶器不法を奏仕に付き北方筋
て八何方迄も伝義を以守りに反抗て相成と
の儀に付意相貫き罪八彼に立て被小あらさる
旨意を相商後来北方を以諸種に相成等端に
被仕変在成て中に且立留甲必丹等も支迷て
容子現に見受及に上八俄羅斯に已に限られ
外国に迫も旨意接て奏長崎に除りに国法
て後案く相心得且一且外国に引合に成に
廉を流聞に立接き に拒に所置て被取仕

海舟書屋

に以て量て益も て者て我等一只今才迄て
に引度等相成に而八乗時相乗不中向を沖廟
権度変動仕に拒に北に中成しに体裁もに何
て方て我孫に北部て俄羅斯私本国に帰帆仕
に被に去に〳〵に南方を指而航立に也反後に
常て夷人共に近を第一清国度門急或に琉球
等に在我其地立留て亜墨利加英夷等示後
て上又て引度し年間に も後走に? 全く彼の
御中に陥り後て不在立に を幸ひ如何体奉行
う上陸其外反抗をしに も更て不図入に

夷砲浦賀港ニ入津仕却而内々数ヶ所ヶ方ヶ
所も弧計何也ニも没ヶ在度ハ所詰定相
成ハ上ハ彼今年四月再渡仕ハとも内々若相調
居ハ伝聞ヶ弧も感伏仕ハ論ヶ方ニ候ハヘヶ
蠻夷かゝらも弧入ハ次第ニも在成所外穏ニ
相調上陸ヶ上為渡休長ハニも及申ス数第一
意接ハ々健レヶ夷も方ヶハ江戸表ハ相伺
ハ々候ニも相成ハ数等相知りハ間自然上陸
も為仕ハ来ハ弧相成場合ニ知りハヶ没ヶ
ヶ事ハ後列ヶ上度支ヶ寺院等ハ上陸

海舟書屋

為渡休長ハ方ニも方ヶ成ヶハヶ没ヶハ度
度ヶ渡再渡渡ヶハ度ヶ百計方別段評議仕申
上ハ度も在ヶ也云退帆ヶ若相遂りハ封書類
到来仕ハ被見ヶ上其後拙ニ等自然没ヶ不在
度ハハも可能ハ於合も方ヶハヶ其度上陸
ハ度度等ヶ可否尚篤ヶ反調申上ハ拙ヶ仕ハ
私共評議仕ハ類書面ヶ通ハ度ハ内々ヶ書面
遂上仕此段申上ハ以上

十一月

深谷遠江守
鵜殿長門守

大久保市蔵殿

堀織部

筒井肥前守

川路左衛門尉

荒尾土佐守

古賀謹一郎

先達而御書面を以て御伺ひ御話も有之候ハ長崎表ハ御来ル魯西亜私退帆ニ不拘道中是迄之日割を以進ム旅行仕ル六日左衛門尉殿

海舟書屋

肥前佐賀表迄既ニ途中ハ長崎表ハ御来ル魯西亜私再渡ニ付急ぎ彼地ハ御発ル筑中城ハニ付文ニ順達ニ上置候を不乎発急キ左衛門尉殿ニ同八日肥前守殿謹一郎ニ同九日土佐守殿ニ同十日長崎表ハ御発仕ハニ付左衛門尉ハ魯西亜私再渡ニ付子大澤豊後守水戸花房豊後守ハ兼ハ発去ル五日辰刻長崎港ハ入津仕ル迄接使ニ者ハ通詞相添発ニ付相紀ハ由ニ発全ハ迄御出発ニ付て渡来いたしハニ無相違外敵数等も不相図

以拙夫内通筋内渡安之御且先日中亜ハ通り
筒井肥前守其外役々ハ安安之ハ彼と相尋ハ
守支ニ道中ニ張支来ル八日より十日迄ハ安
之吉中達ハ変夫ハ為ハ右日限迄迄も相待来
ハ日八日迄ニ右役々面会安之ハ彼を亜ニ出
帆江戸表ハ相出吉中立今般意接として私
夫出家老内通筋内渡ハ為ハ安基鈴意渡
しハ体ニ為ハ何板中論ハ為も更ニ来引不渡
ハニ付安修修先立として長老ハ善後役深京
支右郎ハ長崎奉行より中渡説人として接使

海舟書屋

之亜のハ長添魯西亜私ハ長老私ハ変道中川
支ハ者之延引いたしハ彼来ル十三日迄之
間ニも迄之ニ為ハ吉を也渡使役より中達ハ
変断絶渡いたし十日安相達面会相成ハ来ニ
ハ相待ハ張生吉中国ハ日国日ニも必安相
達面会出支ハ田相約亜ハ昭末右来ハより要
細中国談判中去月十七日松平河国守ハ渡
内書有来先達ハ魯西亜使長より長出ハ書面
本書和解等河国守より宿次を以長城ハニ付
右書類懸賞都奉仕ハ変今般之変姫夷地境界

事ニ付而ハ不容易中立も有之候而肥前ヨリ
長崎ヘ引渡ス相図の儀ニハ兼而ハ保ヲ成シ
内願意之通被ニ而計治定之内接拶ハ門延亜
い振ヲ仕ル筈ニ付ハ掛引方表六ヶ敷其上ハ
返翰之義如何振通申表急ハ而も十四日之間
ニ合兼ヲ中ハ而も長崎奉行より申達い儀
相達ニ相成彼方乗交ニも相相ヲ中ハ間長崎
表奇院之図不反締ハ之場不見計上陸中身相
意内食意ハ仰付ハ器長崎奉行ハ該合仕ハ且
又魯西亜人ハ今般中立之儀其後音重ハ而も

海舟書屋

進而帳夷地境界相定ハ義之義文ニ相成ヲ中
ハ間何ハ而も彼方中立之図不相商之廉ニも
文ニ被ニ無論およひハ振ヲ仕ヲ相成も兼伏
ハ而ハ右書面を間達之儀為中立ハ而内返翰
相渡ハ振仕度ハ振一体之振子彼方ヨリも
事を記しハ振ニと仕向ハ義故右体之義を中
ニ以兼伏仕間敷と存以心能仕ハ間百計方事
伺度ハ振ハ先ハ而を防御之日数も相掛リ候
返答間百意接向延引いたしハ清兼出帆江
戸通海ヘ相巡リハ心定之義其義を第ニ

肥前与左衛門尉に委任仕候亜墨利加国又七見
迎十分ニ取計ひ中高由書取を以て仰渡ル詮
も無之取ル出入ル日社上一同厚談判之上て
御文渡聲和相成兼而中上亜ル書面并ニ長崎
之次第ニ基き動奇之上ル趣意と齟齬不仕様
取計ル合ル産ル様仕彼国の儀迫之様子迫く
長崎奉行より来り候趣ニ而ハ何ハ事柔不
法而已申募り御ハ来ニ不意等方之儀を亜
人浦賀へ相出ル中成ル由ニ付只管世俗を
厭ひル様ニ相案しル而を深右ル附迫十分之

海舟書屋

後ハ中御ル二付穏順之上ニも穏順を尽し通
理詰ニ而兼仕為清何も此表ハ取計ル取
之免ル様ニル清左右体不法之我狀ニ付意外
之浦賀ル相出て中ル御計ル日方一ニ表之
ル心様之亜成亜ル方ニもて方之ル且又先達
ル清相成ル書取之趣ニ而ハカラフト島ル
上陸之夷人も魯西亜人ニル為引拂ル様何
之先取計方もて方之市ル仰渡を方之ル様
今般ル下書面之趣ニ而を同島并エトロフとも
元来彼方之亜の〳〵中成ル様之変ニ付迫

も以下知る様に致し度存候所今度長崎
表奉院を同じく上陸致し長崎表より中国へ
参候上を右地續き山野等にも為運動度様
存候ハ其外種々自信を事を以十一月夕迫迄
中暮りに成候上とも如何様に不法にて中出候
も難計右等に次第に而も掛合方容易に相整
ハ様も是迄如く表心配仕候に付去候令事を整
不申相分を相成候共国那不拘様蒸気に而
活を飯を以孫に百計の振に仕事務に成右を
長崎表より一同中渡ハ上百計の義に付度ハ依

海舟書屋

て中上ハ以上

丑十二月

當地へ渡来を魯西亜永く参に付去ル十三日
町便を以中上ハ飯も出度ハ義永き義為意接
に見を音長崎表より中達ハ聚先達来箱
持参を長を長崎出役而に在出ハ為此度役
を者彼永に在我ハ而礼長相當に付者を
を之礼を百般およひハ義にハ直に出帆
つ渡中出容易に引留来ハ様に付一同相談

ゝ上ハ善隣後ハ小人目付彼我ニ先を使長率
國命を奉し外國ニ使役し久ゝ常永延翰相侍
居右ニ付私共愛意接として遠路慈ゝ長誠懇
ニハ返翰をも持参いたしたる頃帰りかゝる一
意ゝ對後にも不及自國ゝ禮義を以已重し奉
朝ゝ禮法ニハ不拘出帆ゝ変中出ハ後事実相
當ゝ中象ニ安ゝ長況此陸ニ至勝手作ゝ変中
巻り左右ニ幸者出帆ゝ彼ゝの変使長心懇を
以彼しハ義ハ格別世方於て法ゝ変留変ニハ
安ゝ既ニ意接として重任をも西英をハ幸

海舟書屋

竟其國ニ對し禮義を尽しハ篇ニ付あるべハ
何拓中國ハ如も此上ゝ禮義を厚し彼我ニ長
誠ハ義ハ國法於ハ強相成変ゝ吉為中論ハ変
兼偖いあし初見ゝ長此方ニ長誠右禮相海ハ
後彼ゝ彼我ニも相誠ハ〻中論ニ及ひて中吉
中出ハ号兼知ゝ吉接拒およひ亜去ル十四日
使長其外とも長崎西ニ後有ハ出し彼ゝ面
會およひ遠人を此時けゝ此頃意を以長崎を
彼ニ中後相意ゝ答意中付を此用向を不中後
慰労一ト通ニ彼し私共ゝ内証茶を大語〻厚

同食致し候事ゝ外右脱ゝ節ニ而一同退く
酒食はゝ致し節有之候ゝ旨接拶中迚之内り同
十七日ニ至彼船ゝ於て後ゝ餐致し度旨申候中
出ゝ二付一同中後ゝ警衛向之事ゝ長崎奉行ゝ合
不目立様之ゝ厳重ニ相立ゝ上船ゝ乗同日九
時彼船ゝ在船其砲薬ゝ中上亞ゝ鉛を以搭ゝ
より土産物ゝ品ゝ受使ゝ者如逐業ゝ
いたし船中ゝ残所見ゝ為慰ゝ為砲陣操
練大砲打方ゝ仕方ゝ仕其外料理ゝ茅迫丁
寧ニ中有禮ゝ為ゝ外恭敬懇切ゝ尽しもてな

海舟書屋

し奉合第一同右船引揚中ゝ翌十八日西ゝ後
所ニおゐて返簡相渡し右ゝ品ゝ茶換方ゝ
対印ゝ後相渡ゝ義ゝ旨ゝ中同ゝ義右節ゝ
きゝ対印ゝ上ハ其後大切ニ持帰り彼方改有
ゝ義出度ゝ返輪ゝ意味會得ゝ波ゝ為ゝ
諸事ゝ後別紙相成ゝ如相渡ゝ振中如右ゝ
全ゝ返輪ゝ重し旨ゝ為ゝ中家ニ有ゝ度ゝ
ゝ旨渡共一同評議ゝ上先達ゝ渡相成ゝ返
輪ゝ方相渡ゝ義仕ニも熟覧ゝ上ニ為中
出度其餘使者ゝ不相ゝ義も仕渡ゝ簡ゝ

以百計猶餐魚をもゝ中身ハ変更加工相整仕
合者ハ由を以一同承順仕ハ右之通是迄之
儀相法おゝ〻ハ第事石沢相濱中ハ日間廿日
より西ハ浜百ハ学出迄之魚接仕ハ心設之儀
産ハ夷人之情態ゆるかしき相子ニ付十
分之掛合を以届ゝ中ハ其所是迄此度魚接之
次第ニ参ハ伺相之相成ハ之新計ハへ
共先ッ是迄之振合を以相ニ取まとめ 沖作
儀ニ不拘振百計ゝ中を者ハ依之先是迄之
分後荒増申上ハ以上

海舟書屋

五十二月十九日

筒井肥前守
川路左衛門尉
荒尾土佐守
古賀謹一郎

御返翰

伏接來札知
貴國御前大臣布恬廷所御命航來親遞而其書
實係上宰相子也利羅德公見贈馬閲書中所
陳述云。

貴國

大君主思我兩國邊疆之交錯欲加釐正備悉意旨

又云

貴國既拠古來未有廣大之邦土無要別得新地

持盈保滿之道良宜爾我邦與

貴國各土其土民其民無事相安原靡閑衅之端

乃今般使節之舉出其好意而不出惡意亦為彰

明較著不容疑者

貴國既以好意來我國何得不以好意相報耶

第邊土之經界

海舟書屋

貴國以為甚不明晰則諭飭邊藩細加查覈而差

大吏與

貴國官人會同商議以歸劃一然邊藩之查覈必

按圖藉確有憑據慎重從事不許絲毫疎繆是固

非今日所能辨也若夫貿易來往之事則祖宗遺

法有屬禁壁世所遵奉弗失故曩昔貴國嘗有開

市之請而我邦業已固辭意其巔末

公等所克悉也但現今宇内形勢變遷貿易之風

駸々日長誠不能取古例律今事頃者合衆國人

亦來乞市日後列國之乞市者必接踵而至夫列

國乞市之繁如此乃是我盡一國之力應羅星羅
碁布之萬國其力之給不給未可知也且如我境
內邦土之貢檢其多寡精粗亦豈旦夕可辨之事
耶矧我
君主新嗣位百度維新如斯等重大事須必叅之
京師諭告之列侯群官協同商議々定而后從事顧
勢不獲弗費三五年之時月雖差似延緩
公等且從吾言坦懷以俟焉迨議論一定諸事整
頓之後便當登時報聞也況我國之於
貴國壤界相接宜加鄭重故特遣重臣二員於長

海舟書屋

崎會晤布恰廷以盡其曲折而其他宜布報者亦
皆俾之面悉幸有以諒之不宣

大俄羅斯上宰相子也利羅德公閣下

阿部伊勢守正弘
牧野備前守忠雅
松平和泉守乘全
松平伊賀守忠優
久世大和守廣周
內藤紀伊守平信紀

大日本國老中

嘉永六年癸丑十月十五日

二四八

開國起原卷四

海舟書屋